



Data

監督・脚本：外山文治
出演：村上虹郎／芋生悠／岡部たかし／塚原大助／康すおん／花王おさむ／山本浩司／田川可奈美／江口のりこ／石橋けい

■■■ショートコメント■■■

◆チラシを見た時点で興味を惹かれたうえ、小泉今日子らが立ち上げた会社の第1回プロデュース作品ということにも興味あり。そのうえ、新聞紙評の多くは絶賛に近いから、こりゃ必見！さらに、一度映画館に行ったときは満席だったので、更にこりゃ必見！しかし・・・。

◆チラシによると、本作のストーリーは次のとおりだ。

俳優を目指して上京するも結果が出ず、今ではオレオレ詐欺に加担して食い扶持を稼いでいる翔太。ある夏の日、故郷・和歌山の海辺にある高齢者施設で演劇を教えることになった翔太は、そこで働くタカラと出会う。数日後、祭りに誘うためにタカラの家を訪れた翔太は、刑務所帰りの父親から激しい暴行を受けるタカラを目撃する。咄嗟に止めに入る翔太。それを庇うタカラの手が血に染まる。逃げ場のない現実に絶望し佇むタカラを見つめる翔太は、やがてその手を取って夏のざわめきの中に駆け出していく。

◆翔太（村上虹郎）は、いかにも今風の主人公にしたがるキャラ（？）だが、実家で、「いい加減才能のあるふりをするのはやめろよ」ときつく言い放つ兄貴の姿に私は納得。なぜ、こんな中途半端な男が映画の主人公になるの？こんな男では、父親から暴行を受けるタカラ（芋生悠）がハサミで父親を刺す現場に出くわした後、咄嗟に一緒に逃げたとしても、所詮うまくいくはずはないと私は確信。

チラシには、「こうして、二人の『かけおち』とも呼べる逃避行が始まった——。」と書かれているが、なぜこんな2人の行動が「かけおち」になるの？

◆映画は所詮“作り物”だから、現実を無視して、主人公の2人だけを浮き彫りにするのは自由。それも演出手法の1つだと言えば、それだけの話だ。しかし、いくら和歌山が田舎だと言っても、あの服装で、あの雰囲気、あんな風に2人だけの逃避行を続けられれば、

情報化社会の今、すぐに「御用！」となって、逮捕されてしまうのでは？

そもそも、着替えた服はどこで買ったの？自転車はどこで盗んだの？また、今は非常時だから「二人乗りは禁止だよ」とは言わないが、自転車での逃避行はいくら何でも……。はからずも当の本人も「子供のかくれんぼ」みたいなものと言っていたし、2人を追う警察も、「子供のかくれんぼに付き合うようなもの」と言っていたが、そんなものを映画にしようとするの？

もともと、新聞紙評では、それが、例えば「若さあふれる二人が疾走する声明の瞬間を和歌山の自然とシンクロさせます。」「波の音に覆いかぶさる年の喧騒。行く先もわからないまま走る若者2人の後ろ姿。一瞬一瞬の表現に映る、寄り辺ない心象が切実に胸を突く。頭より先に心が共振する。」と絶賛されているが……。

◆そもそも翔太は、なぜタカラを連れて逃げているの？私にはそれがサッパリわからない。また、逃げようと思うのなら、なぜもっと頭を使って捕まらないように逃げようとしなの？私にはそれもサッパリわからない。私にわかるのは、この男は相当なバカだということ……。そして、私にはこの男のバカさ加減が、逃避行のある時点で、「なぜ俺はこんなことに巻き込まれたんだ！」とタカラに当たる姿で頂点に達することに……。

◆本作に登場する主人公の翔太がバカなら、警察（和歌山県警）はもっとバカ！なぜ、こんな2人をさっさと逮捕できないの？さらに、いきなり「バイトさせてください」と言ってきた2人をバイトさせる農家もバカ。『レ・ミゼラブル』では、ジャン・バルジャンに一夜の宿を提供した神父は、彼が銀の食器を盗んで逃げてもなおそれを許したが、それは神父様ならではの広い心があったからだ。まさか、ここでタカラと一緒に泊めてもらった翔太が、ジャン・バルジャンと同じように夜中に盗みを働くとは……。

さらに、身元不明の女を「20歳以上」だと確認しただけで雇うスナックのママも如何なもの？いくら映画は自由とはいえ、もう少し法治国家にふさわしい当たり前のストーリーにする必要があるのでは？

◆逃避行の結末はそれなりに劇的なものに？私はそう期待したが、残念ながら本作のそれは通り一遍のもの。他方、2人の処罰は如何に？そう思っていたが、残念ながらこれも……。

絶賛する多くの新聞紙評に反して、本作についての私の評論はこんなもの。結局2時間も無駄な時間を過ごしてしまったという思いでいっぱいだが……。

2020（令和2）年9月23日記